

(対象事業：美術館・博物館の自主企画による諸外国との交流展覧会等の事業)

事業名：『日英交流 大坂歌舞伎展－上方役者  
絵と都市文化－』

事業者名：早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

連携事業館名：大英博物館(英国)および大阪歴史博  
物館

住所：東京都新宿区西早稲田 1－6－1

TEL：03-5286-1829

FAX：03-5273-4398

HPアドレス：[http://www.waseda.jp/enpaku/  
index-j.html](http://www.waseda.jp/enpaku/index-j.html)



### ①施設概要

演劇博物館は日本で唯一の演劇専門博物館として昭和3年開館以来、日本国内はもとより世界各地の演劇資料を収集してきた。所蔵資料は錦絵4万7千枚、舞台写真30万枚、図書15万冊、その他衣裳・人形などの演劇資料5万2千点、あわせて数十万点以上にも及んでいる。演劇博物館では各種展示の開催、インターネット上でのデータベース公開などを行い、膨大なコレクションがさまざまな分野の研究に役立てられるよう多彩な活動を続けている。

### ②事業の意図目的

早稲田大学演劇博物館と大英博物館の役者絵の名品を主体に、世界中の名品を集めたのが、今回の展覧会である。さらに今回は、歌舞伎研究の中でもとりわけ未開拓分野であった上方歌舞伎の世界に焦点を合わせ、三代目中村歌右衛門（芝翫）や初代嵐璃寛らの名優の舞台姿を中心とする、「上方役者絵」を取り上げることとした。実はこれは、文部科学省の学術フロンティア事業による研究の一環として、早稲田大学演劇博物館が、日本の研究者に大英博物館・ロンドン大学等の研究者を加えて、4年にわたり行ってきた、日英両国の研究者による共同研究の成果なのであり、その成果を展覧会の形で発表するという側面をも持っている。また本展覧会に関連する学術研究集会を演劇博物館21世紀COE事業の一環として位置付け、大規模な国際シンポジウムを催した。本展覧会は、世界の優品を選びすぐれた美術展覧会であるだけでなく高い学術的意義を担うという点でも特筆に値するものであり、両々相まって世界でも初の試みである。

### ③事業概要

本展覧会は、ロンドン(英国)・大英博物館、大阪・大阪歴史博物館、東京・演劇博物館と2カ国3箇所を巡回する、右3館の共催による展覧会である。平成17年6月30日に大英博物館で始まり、同10月に大阪歴史博物館へと続き、平成18年1月20日に演劇博物館で終了した。本展覧会は演劇博物館における2年間の下調査を経て、本館を中心に平成15年から本格的準備研究に入り、平成17年の開催を実現した。なお本展に合わせ、演劇博物館独自で国内外の著名な研究者を招いた国際シンポジウム、演劇講座も開催した。

### ④事業の製作物及び報告書等

ポスター (B2 200枚)

チラシ (A4両面 30,000枚)

図録 (日本語・英語)

日英交流 大坂歌舞伎展－上方役者絵と都市文化－展示スケジュール(改訂版)500部

### ⑤参加者状況

参加者人数 延べ 2,061 人

## (1) 事業の実施状況について

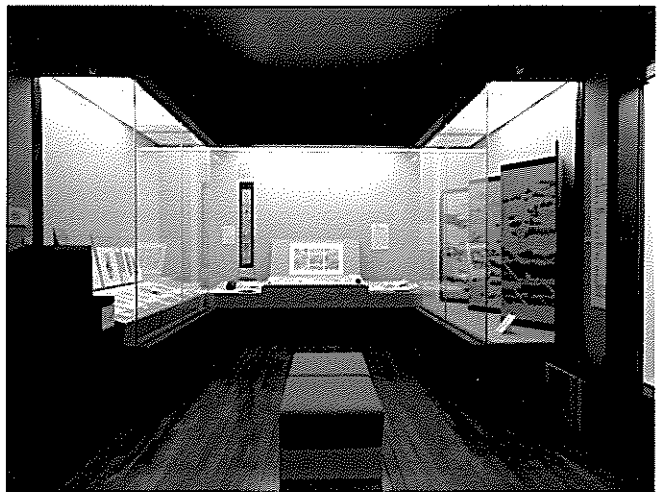
巡回展「大坂歌舞伎展—上方役者絵と都市文化—」は、平成 17 年 6 月 30 日から 9 月 11 日までイギリスの大英博物館で、同年 10 月 1 日から 11 月 23 日まで大阪歴史博物館で、最終開催地で本事業の対象となる演劇博物館では平成 17 年 12 月 1 日から平成 18 年 1 月 20 日まで開催された。三館を約 7 ヶ月間にわたり巡回したこの展覧会は、観覧者の総動員数が 3 万人以上にのぼり、盛会な展覧会となった。なお、演劇博物館での入場者数は 2,061 人だった。

日本での出品は 4 カ国、32 機関（個人コレクターを含む）に及び、日本 163 点（うち演劇博物館 82 点）、イギリス 132 点（うち大英博物館 67 点）、ドイツ 50 点、アメリカ 2 点が出品され、総展示件数は 347 点にのぼった。三枚続き等、組物を単体で数えると 400 点をゆうに越える点数となった。

演劇博物館では、この出品作品を 4 つのテーマに分け、特別展示室、民俗芸能室、企画展示室Ⅰ、企画展示室Ⅱの四室を使用し、展示を行った。また、三階の近世展示室においてもミニコーナーを設け、本展に合わせて当館所蔵の役者絵の中から特別出品を行った。なお、12 月 23 日から 1 月 9 日までの年末年始の閉館中に大規模な展示替えを行っている。

第 1 室となる六世中村歌右衛門記念特別展示室では、「歌舞伎への情熱 1—役者絵の展開—」と称し、江戸の勝川派と一筆斎文調によってはじめられた似顔役者絵の発展過程と、その影響を受けた上方役者絵の成立、つまり、耳鳥斎らをはじめとする素人絵師の作例を最初期例とし、流光斎で確立されて、さらに松好斎によって独自の発展を遂げていくまでを追った。また、上方と江戸の役者絵の比較を行なうため、勝川派や東洲斎写楽などの作品もあわせて展示した。

第 2 室は民俗芸能室を改装し、「歌舞伎への情熱 2—文化環境と最良たち—」として、当時の歌舞伎を取り巻いていた環境と、上方の最良たちの歌舞伎に対する情熱を紹介した。具体的には、当時大量に出版されていた歌舞伎関連の手引書をはじめとするいわゆる劇書や、役者をモチーフにした双六や見立番付等、市販品として一般に出回っていた資料を展示し、歌舞伎が広く庶民の間にまで普及していたことを紹



第 1 室 特別展示室「歌舞伎への情熱 1—役者絵の展開—」



第 2 室 民俗芸能室「歌舞伎への情熱 2—文化環境と最良たち—」

介した。次に上方の歌舞伎の環境を示すものとして、役者や熱狂的な歌舞伎ファンである最良たちの活動の様子を摺物や貼込帖、錦絵で紹介した。これらにより上方の歌舞伎を取り巻く独特の環境を伝えた。

第3室は、企画展示室Ⅰを使用し、「一大ライバル 璃寛 対 芝翫」として当時の大坂歌舞伎界を席卷していた二大スーパースター、二代目嵐吉三郎（璃寛）と三代目中村歌右衛門（芝翫）のライバル関係に焦点をあて、上方歌舞伎の隆盛ぶりを紹介した。二人のライバル関係は、それぞれの最良や歌舞伎ファンを巻き込んだ熾烈な応援合戦を展開させ、結果的に大坂の歌舞伎文化自体を興隆させていくことになった。この部屋ではそうしたライバル関係に関する資料や、絵師・北洲に代表される上方役者絵の優品の数々を展示することで、上方歌舞伎文化と上方役者絵の隆盛を表した。



第3室 企画展示室Ⅰ「一大ライバル 芝翫対璃寛」



第4室 企画展示室Ⅱ「ライバルの世代交代」

第4室は、企画展示室Ⅱで「ライバルの世代交代」として、璃寛・芝翫に続く新しい若い役者たちの台頭と、以後の歌舞伎界の動向を紹介した。璃寛の死後、芝翫の独壇場となっていた大坂歌舞伎界には、芝翫が育てた二代目璃寛や二代目芝翫など、新しい若い役者たちが台頭し人気を得ていく様子をそれぞれの錦絵からなるべく時系列になるように展示し、大坂歌舞伎界が次世代へ継承されていく様子を伝えた。

三階近世展示室では、一角にコーナーを設け、特別出品を行った。早稲田大学演劇博物館が誇る役者絵コレクションは、現在、四万点にものぼる。その中から今回の展覧会にちなんだ上方役者絵を、総計二七作品選び、展示した。

以上、19世紀の大坂歌舞伎を取り上げることで、全体として、歌舞伎を取り巻く文化環境や上方役者絵の成立と発展をとおり、江戸歌舞伎とは異なる独特の大坂歌舞伎の姿とその隆盛ぶり、また上方役者絵の特徴などを紹介できるように構成した。その結果、本展覧会は、現在では衰退の機にあり耳慣れなくなってしまう大坂歌舞伎や上方役者絵を、広く一般に紹介する役割をも果たすことができた。また、地域の中核をなす早稲田大学の中の一研究機関としても、特に世界に散らばる上方役者絵の悉皆的な調査研究の成果として、世界各国から最も保存状態が良く美術的価値の高い資料や新出の資料を選定して展示することができ、上方役者絵の美術的価値に対する再認識を促すことができた。

なお、詳しい展示品、出品先については、成果物の「展示スケジュール」および図録をご覧ください。

## （２）地域との連携について

本事業は、大英博物館・大阪歴史博物館での展示に続く、巡回展としての側面も持っている。ただし各館が同内容の展示および付属行事を行うのではなく、それぞれが特色を生かして個性的な事業を実現すべく努めた。

すなわち大英博物館においては、英語による図録作成を通じて、上方役者絵研究をリードする一方、同館でも稀な有料展を開催し、展示ディスプレイに関し日本趣味に対する新しい表現を実現した。大阪歴史博物館では地元大阪の歌舞伎を再発見するというテーマを追求した。

そして本館では、国際共同研究の成果としてこの展覧会を位置付けた。この研究には大英博物館・大阪歴史博物館のスタッフを含む日英の研究者（いずれも本館研究員）が参加したが、図録監修のアンドリュー・ガーストルンドン大学教授らが、赤間亮立命館大学教授の協力の下に、英国を初め欧米各国の役者絵の所在調査を行い、また日本側スタッフは国内の役者絵について同様の調査を行って、それらを世界最大のコレクションである演劇博物館の役者絵コレクションと比較検討したのである。その作業には、演劇博物館が関わる文部科学省私立大学等学術高度化研究事業・学術フロンティア推進事業「日亜・日欧比較演劇総合研究プロジェクト」に参画している役者絵研究会が加わり、役者絵研究に関する世界的なネットワークを構築しつつ、この研究そのものを上記プロジェクトの一環として遂行した。こうした作業の過程で、諸外国の日本学研究機関・研究者より、演劇博物館浮世絵データベースを通じて獲得した研究情報の利用申し込みが相次ぐなど、本研究の副次的効果もあった。すなわち、上方役者絵のみならず、広く役者絵の全体に関する研究が世界的規模を持って拡大する画期となったのが、本展覧会とそれに先立つ研究事業であったわけである。なお本展覧会開催のために、日本国内はもとより、世界中から役者絵の名品が集められたが、その多くは無償提供を前提としており、今後の展示活動についての互惠的関係を期待させるものとなったことも忘れがたい。

このような全世界的な規模の連携のみならず、首都圏の中高等学校生徒、市民との連携も模索された。演劇博物館ではもともと双柿会と名付けられた会員制の支援団体を付属させているが、同会有志が館内の警備・展示説明等にボランティア参加することにより、展示のあり方はより親しみやすいものになった。平成17年12月には、日本学術振興会事業「ひらめき☆ときめきサイエンス」に採択されて、本学における最先端の日本古典演劇研究の紹介を首都圏中高校生に行ったが、そこに参集した生徒諸君に本展覧会を見学してもらい、好評を博した。大学周辺住民に対しても、展覧会や付属行事を広報・招待することにより、地域文化拠点としての役割の一端を果たした。

## （３）成果物について

- ・ポスター（B2 200枚）
- ・チラシ（A4両面 30,000枚）
- ・図録（日本語・英語）

A4変形、302頁、オールカラー、2,000冊

展覧会に出品した資料をまとめた図版及び解説。上方役者絵関係の論文を掲載。

- ・日英交流 大坂歌舞伎展－上方役者絵と都市文化－展示スケジュール(改訂版) 500部

(4) 参加者の反応：アンケート回答率：9.6% (198/2061 人)

- ・ 国外にある作品（日本のもの）をもっと現代の人に開示してほしい。
- ・ 外国からの図版によらないといろいろ企画が成り立たないのかと思うと残念な気もしますが、外国の図版がとてもきれいな色を保っているのを見ると、大切にみつかわれているのだなあとも思い、うれしくも思い、皮肉な気もします。
- ・ 役者の錦絵の一時代を切り取って見せて頂いてよく解りました。
- ・ とても力のこもった内容で、感服いたしました。
- ・ 伝統芸能保存のためにも、このような展覧会を多く望みます。
- ・ いままでよく知らなかった上方歌舞伎でしたので、面白く見させていただきました。
- ・ 古典芸能に触れる機会はあまり持つ事が出来ません。初めてこんなに多くの、そして詳しい展示を見る事ができて嬉しいです。
- ・ 歴史を知ることは、現在、歌舞伎座へ行く折にも楽しみが倍加して面白いと思う。
- ・ 上方の浮世絵を見る機会がないのでよい企画です。
- ・ 役者の浮世絵以外の絵、印刷物を初めて見た。歌舞伎の昔の隆盛ぶりに強い印象を受けた。
- ・ 海外にかくも大量の、内容のあるものが流出している事、また、保存状態のよさに驚く。
- ・ とても面白かった。ドイツや大英博にある資料も多くて意外でした。歌舞伎に興味があった。
- ・ 解説がとても分かりやすく、見方を知ることができたのでうれしい。狂歌が書きこんであると、なおうれしいです。
- ・ 建物がとても気に入った。すべての展示物に見ごたえがあった。

(5) 芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

今回、芸術拠点形成事業を実施したことにより、一私立大学付属の博物館相当施設にすぎなかった演劇博物館が、世界的に知られる演劇研究・展示機関として認識されるに至ったことは、特筆すべき大きな効果である。本館所蔵の演劇資料の価値については、従来から広く知られるところであったが、大英博物館のような世界的に著名な施設や、大阪歴史博物館のような自治体付属の大規模施設と連携可能な組織であるとは、今まであまり認識されていなかった。本事業以前に本館が行った世界的展示企画は、平成九年にニューヨーク・ミュンヘンを巡回した「世界の中の日本演劇展」のみとよかったが、このたびの展覧会に前後して、平成17年8月にはデンマーク・コリングフース博物館から出品依頼があり、また翌18年秋には、ノルウェー共和国とのイブセン没後100年記念事業の共催が決定するなど、海外との交流事業が増加した。平成17年下半年から現在に至るまでの間に、海外の博物館や演劇研究施設からの交流協定締結の申し込みも飛躍的に増加しつつある。これらは海外における評価の高まりの反映であり、今回の拠点形成事業を境に生じた事態である。わが国における演劇学研究の最大拠点として認識されつつあることも、これまでの本館の研究活動の成果でもあるが、本事業の波及効果と認識している。

本館は展示活動のみならず、演劇研究の拠点でもある。このたびの芸術拠点形成事業実施の結果、演劇研究面での世界的なネットワーク構築が可能となったことも、効果の

一つとして付け加えたい。海外からの研究者・見学者の来訪の増加、本館研究スタッフの海外での研究成果機会の増加が、その実例である。また本館の役者絵データベースの利用件数も、大きく伸びつつあり、類縁ジャンルである歌舞伎番付データベース構築のための研究協力の申し出などもあり、デジタル博物館として展開していく今後の可能性に、大きな期待を抱いている。芸術拠点形成事業という社会的活動に採択されたことが、これまでの特殊かつ個別的な演劇学研究のあり方にも影響を与え、研究に携わる者自身が研究の社会性、すなわち研究成果の公開と社会還元とに大きな意味を見出すようになったわけであり、これもまた本拠点事業の重要な効果といえよう。

#### ○テレビ、関連誌等

- ・NHK教育テレビ「新日曜美術館アートシーン」  
平成18年1月8日9時～10時（45秒程度放映）  
20時～21時（再放送）
- ・伝統文化放送：11月中20回以上オンエア
- ・国立劇場 第247回 平成17年12月歌舞伎公演 筋書  
第248回 平成18年 1月歌舞伎公演 筋書
- ・歌舞伎座 平成17年12月 筋書  
平成18年 1月 筋書
- ・東京都交通局 平成18年1月1日 「びっくあっぷ」
- ・浮世絵芸術 第150号 平成17年7月20日刊「特集 上方絵」
- ・社団法人日本俳優協会 平成17年10月19日 ホームページに掲載
- ・NEC株式会社 BIGLOBE 会員誌「SAAI isara（サーイ・イサラ）」12月号  
平成17年11月30日発行
- ・日本和装 「KOSODE」28巻 平成17年12月6日発行